

Ethnographic Conspectus of the Uyghur in Xinjiang Autonomous Region

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17231

中国新疆ウイグル自治区のウイグル族の民族誌的概況

国際社会環境学専攻

アブドゥルシユクル

アブ都西庫ル

アブドゥルラフマン

アブ都熱合曼

Ethnographic Conspectus of the Uyghur in XinJiang Autonomous Region

ABUDUXIKUER ABUDUREHEMAN

Abstract

This paper aims to present the ethnographic conspectus of the Chinese Uyghur, the largest ethnic group living in the Xinjiang Uyghur Autonomous Region of China. Although studies on their history and contemporary political movement have been accumulated, those which offer ethnographic data are still few. This paper will offer general an ethnographic description of the Uyghur in the Xinjiang region, including their geographic condition, agriculture and commerce, kinship and social relations, religion and rituals, and so on. The most parts of the description is based on an ethnographic study of the Uyghur people written by Abdukerim Rahman and others in Uyghur language and script with the title "Uyghur Tradition (*Uyghur orup-adatleri*)" as well as on the author's own experiences and knowledges as a native Uyghur born in the Xinjian region.

Key Words

Uyghur, Ethnography, Silk Road

はじめに

I 地理・歴史的背景

II 生業

III 親族関係

IV 地域社会

V 宗教・信仰

VI 儀礼

VII 祭礼

おわりに

は、英文でも和文でもこれまでじゅうぶんな紹介がなされてこなかった。ここでは主としてウイグル語で出版されたアブドゥケリム・ラフマン他著『ウイグル族の習俗』と、新疆ウイグル自治区南西部のカシュガル市出身のウイグル族である筆者の見聞および聞き取りにもとづき、新疆ウイグル自治区在住のウイグル族の民族誌的概況を提示する。

I 地理・歴史的背景

(1) 地理的概況

新疆ウイグル自治区は中国の北西部に位置し、「新疆」と略称される。昔は「西域」と呼ばれたが、清の乾隆帝の時代にこの地が平定され、新たな疆域として新疆と命名された。1884年に新疆省

はじめに

中国新疆ウイグル自治区の主要先住民であるウイグル族については、その歴史や現代の政治運動についてはすでに一定の研究蓄積があるものの、具体的な生活状況に関する民族誌的概況について

が設置され、1955年10月には新疆ウイグル自治区が成立した。面積は166万平方[＊]で、中国の総面積の6分の1を占め、行政面積の最も大きな省である。2000年の政府調査によると、新疆の人口は1925万人、そのうち漢族以外の民族の人口は1096万9600人である¹⁾。現在、新疆には47の民族が暮らしているが、主なものはウイグル、漢、カザフ、回、蒙古、キルギス、シボ、タジク、ウズベク、満州、ダオール、タタル、ロシア人などである。

「図1」新疆ウイグル自治区に住む主な民族の人口状況表

民 族	人 口	%
ウイグル族	7,214,430人	45%
漢 族	6,885,000人	43%
カザフ族	1,100,000人	6.8%
回 族	600,000人	3.8%
タジック族	33,000人	0.2%
ケルケズ族	150,000人	0.1%
ウズベク族	15,000人	0.09%
ロシア人	3,000人	0.02%

新疆は中国の5つの少数民族自治区の一つである。北東部はモンゴル、西はロシア、カザフスタン、キルギスタン、タジキスタン、南西部はアフガニスタン、パキスタン、インドと接し、国境線は5600[＊]あり、古代シルクロードの重要な通路である。自治区の中央を西から東にかけて天山山脈が走り、その北部は北疆、南は南疆、東部は東疆と呼ばれる。北疆にはオアシス地帯のジュンガル盆地が広がり、東北にはアルタイ山脈がある。南疆にはタリム盆地が広がり、その南端にそびえる崑崙山脈との間には中国最大のタクラマカン砂漠がある。タリム川は国内最長の内陸河川である。東疆にはトルファン、クムルなどの盆地が点在している。特にトルファン盆地は海面より154メートルも低く、中国で最も海拔の低い地域である。

「図2」新疆ウイグル自治区の地理位置



(2) 歴史的背景

ウイグル族は8世紀頃にモンゴル高原で活躍したトルコ系民族である。初めバイカル湖の南辺で東突厥に服属していた。モンゴル高原時代のウイグルはマニ教を国教とするなど西方文化を採用す

るとともに、東都との交渉を通じて中国文化も取り入れた。

8世紀の中頃に東突厥が衰えてくるとこれを滅ぼし(744年)、以後約100年間モンゴル高原を支配していた。最初の40年間は興隆期で、安史の乱の鎮定に協力して唐に過大の要求をおこない、その内政にも干渉した。それに続く40年間は西方へ発展し、吐蕃やエニセイ川上流のキルギス族と戦った。しかし、その後内乱が続き、ついにキルギス族の攻撃を受けて840年に国は崩壊した。

国の崩壊後、様々な方面にウイグル民族は散らばっていく。一部は南下したが唐の攻撃を受けて滅亡、別の一部は甘州、肅州方面に定住し、しばらく独立を保っていたが1028年に西夏に併合された。しかし、主力は西方へ移住、そのうちの一部は東部天山山脈北山麓のビシバリク、南麓のトルファンに拠って、いわゆる西ウイグル王国をたて、東西文化を融合し独自の文化を発展させた。

また一部のウイグル民族は同じくトルコ系のカルルク族と合流し、西部天山山脈北麓にカラハン朝を建てる。10世紀中ごろにイスラム教に改宗、イスラム勢力の東進に大きな役割を果たした。

12世紀前半に東方から逃れてきた契丹人の西進により、西ウイグル王国はカラハン朝に続いて併合され、13世紀の初めにモンゴル帝国に服属する。この時、ウイグル人は帝国に協力して優位な地位を得た。ウイグル文字は補陀のウイグル人学者タタトニアによってモンゴル人に伝えられ、チンギス・ハーン時代には公用文字(この頃は左から右への縦書き)となった。これはのちにモンゴル文字、満州文字へと発展した。13世紀後半になると、ハイドゥの乱以降、ウイグル商人の権勢は衰える。

14世紀～17世紀の間、現代ウイグル(維吾爾, Uighur)人が形成される。古代ウイグル語と現代ウイグル語は直系の関係にはなく、民族の形成もその間に様々な混合があったことを想像させる。

1759年に中国で巨大な満州帝国が設立され、ウイグル王国を取り込み、1862年までそれを管理した。1864年には独立王国を設立したが、1876年に將軍左宗棠によって攻撃され、1884年11月18日に

は「新疆」という名前で満州帝国の領域へ統合された。この新疆という語は「新しい領域」あるいは「新しい主権」を意味する。漢人は1911年に満州支配を成し遂げて、共和国を設立したが、その支配者は1949年に共産主義者によって滅された。その後、ウイグル族は中国の共産主義の下に入れられた。

Ⅱ 生業

ウイグル族は長い都市化した生活歴史を持つ。その生活は狩猟や牧畜を中心にした生業からしだいに農業や工芸を中心にしたものになり、各分野での専門化した独特な生業習慣が生成した。

(1) 農業

ウイグル族は、タクラマカン砂漠の周縁に点在するオアシス地域に居住しており、おもにオアシスでの灌漑農業に従事している。そのため、現在でも農村人口が多数を占めている。トルファン盆地では、掘り抜き井戸をつらねたカレーズと呼ばれる地下水路が発達し、灌漑に利用されている。

ウイグル族の農業は主農業と付加農業に分けられる。主農業農産物としては、小麦、トウモロコシ、米、豆などの穀物を作っている。ただ、現在では小麦の代わりに綿花の生産に切り替えた地域が多くなっている。付加農業農産物としては、メロン、スイカ、イチジク、ザクロ、アンズ、ブドウなど100種類以上の果実を生産する果樹栽培業、人参、唐辛子、トマト、白菜はじめ様々な野菜栽培、アンズ、葡萄を中心とした果物加工（干し）業、羊、牛、鶏、馬、ラクダ、アヒルなどを中心とした家畜飼育業がある。これらの果実や加工製品は、商品作物としてバザール（市場）で取引される。このバザールの開かれる時間は地域によって異なる。例えば、カシュガルの場合日曜日か木曜日、アチュシュの場合月曜日である。

[土地所有形態]

新疆ウイグル自治区の農・林・牧畜業に利用できる土地面積は約6800万 km^2 で、総面積の41.19%

を占め、そのうち開墾可能な土地は933万 km^2 、すでに開墾された土地は407万8700 km^2 、利用可能な天然草地は4800万 km^2 、人工草地は66万6700 km^2 で、中国の五大牧畜区の一つである。林業用地は483万9300 km^2 （林地は約153万3300 km^2 ）、林木の蓄積量は2億5000万立方 m^3 である²⁾。新疆ウイグル自治区では中国の他の地域と同様に、農村部における土地所有は、1978年の農村改革における「農家生産請負制」³⁾の導入以後、「村」を単位とする集団所有制となっており、個別農家の営農は、「村」から耕地利用権の分配を受けた耕地における家族経営により行われている。農家は、耕地利用権の分配を受けるにあたり、「村」集団に対して、その面積に応じて、(1) 政府作付計画の履行、(2) 政府への穀物売り渡し義務の達成、(3) 「村」などの集団組織への運営費用・集団的投資資金の提供、(4) 水利施設管理・道普請などの農閑期作業への出役、の義務を請け負うこととなっている。さらに1993年の「農家生産請負制」の改革で、農業生産安定化が図られやすいように耕地利用権の設定期間が15年間から30年間に延ばされた。

耕地利用権の分配方法としては、自給飯米用として家族人口に応じて分配される「口糧田」と、家族労働力数に応じて分配され穀物売り渡し義務のある「責任田」とに区分して分配する方法が、耕地利用の過度の分散を防止する点から推奨された。しかし多くの地域では家族人口に応じた分配のみとする方法が採用され、しかも家族人口の変動に応じて数年置きに割り替えを行う「割り替え（調整）」方式（家族構成等の変動にともなう、耕地利用権の再分配）が併用されている。

[農業生産形態]

農業の生産形態は、各地域の自然環境、経済状況、生産技術の機械化のレベルの違いによって異なる。ウイグル族が住んでいる地域と他の地域を比べてみよう。

まず、自然環境から見ると、新疆ウイグル自治区の南部や東部は全国的に最も乾燥した地域であり、農業に必要な水が足りないため、単に穀物生

産だけでは生活が確保できない。したがってウイグル農民達は、主農業以外に付加農業をやらなければならない。彼らは自分に割り当てられた耕作地を請負する他、自分の経済力や住んでいる地域の環境を生かして付加農業に必要な土地の請負に力を入れている。

例えば、自治区内の北からアルタイ、チョーチャク、イリ等は比較的乾燥が少ないが、山が多いので耕作できる土地が少ない。寒い季節が長いので、耕作するための良い環境が整っていない。しかし、この地域は全国的にも有名な豊かな草原を持つ地域である。そのため、農民達は耕作土地の請負ともに家畜飼育業の土地の請負に力を入れている。さらに、イリは有名なりんご生産地域でもあり、りんご栽培業の土地の請負も盛んである。

東のトルファン、クムル等は最も乾燥した地域であり、雨や雪の量はかなり少なく、夏の気温は他の地域より高い。特にトルファン盆地は海面より154メートルも低く、夏の平均気温は40℃前後で、一番高い時には46℃まで上がる。こうした環境は穀物を作るための良い環境ではないが、糖度が高い果物を作ったり果物加工をするには良い影響を与える。この地域で作られた干し葡萄やメロンは世界的に有名で、海外や国内の商人によって盛んに輸出されるようになっている。

南はウイグル族が最も多く住む、タクラマカン砂漠の周縁に点在するオアシス地域で、おもにオアシスでの灌漑農業に従事している。この地域は新疆ウイグル自治区の他の地域より果物や穀物の栽培に適した環境であり、この地域での農業の歴史も長い。この地域の農民達は従来から小麦、トウモロコシ、米、豆などの穀物を中心とした主農業のほか、自分の住んでいる庭を上手く利用して、果樹栽培や家畜飼育を行っている。請け負った耕作では穀物栽培が中心である。しかし近年、自然環境の悪化や砂漠の広がりによって、この地域の農業環境も段々悪くなっている。この影響で、穀物畑を中心とした土地の請負形態は段々変わりつつあり、穀物畑の請負をやめて、庭ではなくより広い場所での果物作り、またより大規模な家畜飼

育に移行するというような現象が起きている。

[農業経営]

次に、ウイグル族の農業生産を経済面からみる。新疆ウイグル自治区の経済レベルを中国の他の地域と比べるとかなり差がある。

「図4」GDP行政区別データ表

◆ GDP行政区別 (2001年度)

行政区	域内GDP (億元)	順位	1人当たりGDP (元)	順位
広東省	10556.5	1	12215.3	7
江蘇省	9514.6	2	12791.9	5
山東省	9438.3	3	10395.7	9
浙江省	6700.0	4	14325.4	4
河南省	5645.0	5	6098.8	18
河北省	5377.7	6	8270.6	11
遼寧省	5033.1	7	11876.1	8
上海市	4950.8	8	29574.9	1
湖北省	4662.3	9	7734.4	12
四川省	4421.8	10	5308.9	23
福建省	4258.4	11	12268.4	6
湖南省	3983.0	12	6184.8	17
黒龍江省	3561.0	13	9653.0	10
安徽省	3290.1	14	5496.3	21
北京市	2817.6	15	20387.8	2
広西壮族自治区	2231.2	16	4970.3	28
江西省	2176.0	17	3256.0	26
雲南省	2077.5	18	4844.8	29
吉林省	2032.5	19	7450.4	14
陝西省	1841.2	20	5107.5	27
天津市	1826.7	21	18248.5	3
山西省	1774.6	22	5382.5	22
重慶市	1750.0	23	5663.4	20
内モンゴル自治区	1545.5	24	6504.6	16
新疆ウイグル自治	1485.0	25	7714.3	13
貴州省	1082.2	26	3070.0	31
甘粛省	1073.0	27	4188.1	30
海南省	566.1	28	7192.5	15
青海省	300.8	29	5807.5	19
寧夏回族自治区	298.3	30	5307.8	24
西蔵自治区	138.6	31	5290.1	25

※第5次人口センサス (<http://searchina.ne.jp/business/004.html>) より算出

疆ウイグル自治区の1人当たりGDPは7714.37で、全国31行政区の中で13位になっており、トップの北京や上海と比べると約三倍のひらきがある。域内GDPでも1485.0 (億元) で、全国で25位となっている。

自治区内部の各地域の詳しいデータはないが、現実から見ると北部と南部、都会と農村等の間でかなり大きな格差がみられる。同様に農民の間にももちろん差が存在する。農民の中で月に1キロも肉を食べられない家庭もあれば、2、3台の車を持っている家庭もある。経済でのこのような格差は、経済力があるほど土地を広く借りられるといったように土地の請負形態での違いを起こす一

つの原因になっている。この地域の経済状況では北部や東部の経済レベルは南西部よりかなり高い。特に環境の悪化や砂漠の広がりの影響を受けやすい地域の経済力が低い。農業環境がより良い、国境に近い、あるいはトルファンのように海外に輸出できるような特産物を作っている地域などでは、「開発開放政策」の影響で農民達の経済力も上がっている。このような変化によって、いくら農業を続けても経済力が上がらない農民達は農業をやめて、都会や自治区外へ移住し、様々な仕事に従事している。一方、農業の利益で裕福になった農民達は土地の請負面積を更に増やして、一種類の農業だけではなく、多種類の農業を行っている。

中国の経済成長に伴い、様々な現代技術が導入され農業生産技術の機械化も進んでいる。その影響で労働時間が短縮し、動物や人力の必要性は減っている。このような影響で人々は少ない労働力でも大規模な農業に取る込むことができるようになった。しかし、各地域の経済レベルの違いによって農業機械の普及は異なる。新疆ウイグル自治区の場合、他の地域と比べると経済、現代技術、交通手段、情報手段などの発展が遅れているため、農業機械の普及はあまり進んでおらず、人や動物の力だけで農業をやっている地域が少なくない。ただ、20年前と比べると農業機械の数や質も向上しているのは明らかである。農業機械の導入のおかげで、ウイグル族の農業生活においても、主農業にあてる時間が短縮され、付加農業をする時間も増えた。また、労働力が足りない家庭も大規模な農業にチャレンジすることができるようになった。

〔農業形態〕

ウイグル族は独特の方法で耕作する。コーリャンが刈り取られた後、畑を畦で区切って（ならして）、肥料をやって灌漑し、鋤返し、日にさらす。湿り気が調節されたところでまた鋤返し、秋まきの小麦の種をまく。種の上を踏み、また馬鍬で地ならしをし、固める。

小麦の芽が出た後、いくらかは家畜に食べさせ、

いくらかは苗の上からローラーを引いて、苗が際限なく伸びることを制限する。春に地面に犁を入れて、隙間をつくらせ、枯れ草や枯れ木を片づける。苗を植え替え、10～15cmに育ったら、城壁或いは古い壁の土を腐養土としてまく。雑草を犁でとって捨てる。春まきの小麦は2月の終わり頃に上記の方法で耕す。秋まきが先に、春まきの小麦が後から実る。

穀物の収穫はちょうどよい時期に鎌で刈って、ひと束にして結ぶ。そして特別な脱穀場を用意する。脱穀する場所を平らにさせ、固める。その真ん中に家畜をつなぐ杭を打ち、地面に束ねられた小麦をバラバラにして敷き、家畜にローラーを敷かせて、杭の回りを回らせて小麦を穂から離す。一人が家畜を追い、もう一人が小麦を家畜とローラーの下へ投げてやる。穂から離れた小麦はその下に残るので、藁をとって捨て木のシャベルで風選する。風がなければ、毛布でバタバタとあおいで風を起こす。

コーリャンは小麦が刈られてしまった後に蒔かれる。朝に蒔かれた種と午後に蒔かれた種とでは実るときに違いが出る。収穫は灌漑の時期に応じて決められる。コーリャンが実ると、つみとって皮をむいて捨て、棍棒で打って穂から離す。

小麦もコーリャンも脱穀し終わったとき、その場で手伝ってくれた人々に、お礼の穀物が与えられる。すべての収穫物はメドレセ（イスラム学校）、モスク、イマーム、ムアッジン（礼拝の時間を告げる呼掛けをする人）、ハーティブ（説教師）たちのための経費のために、収穫の10分の1を収穫税に相当するものとして差し出す。小麦、コーリャンが刈られて、脱穀場がいっぱいになった後、刈りとりの終わった畑で、貧しい人々が穂を拾うことが許される。動物たちのために脱穀後に残った屑を畑にまいておく。

農業は基本的に家族単位で行われるが、農業はきわめて季節性の強いものなので、種まき・収穫の時期にはウイグルの農民たちは相互扶助的に協力する。

穀物保護では、芽が出てから葉や根などにつく

害虫の被害を防ぐため、穀物にある程度の量の木や石炭の灰をかけたり、アドロスマンと呼ばれる植物の乾いた部分を畑に持って行って風の吹く方面に合わせて燃やして煙をだしたりする。また南新疆でよく見られる暑い風が穀物に与える悪い影響を防ぐため、木の根を切って畑の風が来る方角に並べたり、動物や鳥の被害を防ぐため畑の真ん中に人形を作って置いたりする。

食糧は麻袋や木箱や木の根で作られた籠で保存したり、運んだりする。大量の食糧を長い時間保存する場合には、より乾燥した地下保存室を作って保存する。

[果樹栽培]

ウイグル族の間では「果樹園を持ってない人は力がない人」という諺がある。彼らの習慣の中で果樹栽培は大変重要な意味を持つ。1本の木を栽培することだけでも大変素晴らしい事とされる。果樹栽培は穀物栽培の次に重要な農業であり、新疆ウイグル自治区は「果物の天国」という呼称がある。

新疆の果樹栽培業はウイグル族が住んでいる地域に集中し、果物の種類の多いことや質の良いことなどで世界的に有名な地域である。この地域で作られている特産果物の種類は100種類以上である。多く作られているのは杏、桃、葡萄、無花果、ザクロ、サクランボ、りんご、梨、くるみ、西瓜等で、各果物はさらに味や大きさによって様々な種類に分けられる。また、特定地域で比較的多いことや美味しさから地域の名前をつけて呼ぶこともある。例えば、カシュガルのザクロ、ホータンの桃、アトシュの無花果、カケリクのくるみ、クーチャの杏、コルラの梨、トルファン葡萄、パイザワトのメロン、エリのりんごなどが有名である。新疆では6月から10月にかけて色々な果物があいついで収穫される。この時期に都会の人々は田舎を訪れ、新鮮な果物を楽しむ。これは日本で言う「果物刈り」で、ウイグル語で「セイレ」と呼ばれる。このとき果樹園は観光客でいっぱいになる。

ウイグル族は独特の果物加工技術を持つ。普及しているのは干した果物、ジャム作り、ジュース作り、伝統薬、ムセレス（葡萄酒）などである。ウイグル族のどんな家庭でも加工した果物を保存しており、彼らはこうした加工果物をおやつや薬として食べている。

[野菜栽培]

ウイグル族の野菜栽培は専門化した野菜栽培と付加野菜栽培に分けられる。専業野菜栽培者は野菜栽培を中心とし、卸売りする。彼らは2月に栽培を始め4月からは様々な野菜を市場に出す。付加野菜栽培者は自分で食べる以外の野菜を作り小さい範囲で販売する。彼らは小麦の収穫が終わった後、その畑で季節に合わせて野菜を作る。秋から春にかけて市場に提供し、その収入は小遣いとして使う。

主な野菜の種類は人参、玉葱、トマト、ピーマン、なす、大根、ジャガイモ、ほうれんそう、白菜、キャベツ、南瓜、蕪、ニンニクなどがある。

一般にどんな町にも野菜販売店が設置されており、店では年中野菜を買うことができる。彼らは農民達が作った野菜を買い付けて来て売る。

[家畜飼育]

ウイグル族は定住生活を始めてから家畜飼育を始めた。主な家畜は牛、羊、鶏、アヒルである。11月から4月にかけて牛と羊の飼育に力をいれる。彼らは自分の庭で風が良く通る動物専用の家を建てる。この家には木で作られたオクル（動物が食事する所）と呼ばれる施設が設備される。オクルがある所を高く作る。家畜飼育者は家畜の身長、骨の大きさ、年齢によく注意をする。家畜の飼料は草、ビデ（植物の一種）、メロンをはじめ色々な果物の食べ残し、乾いた小麦の根や小麦粉を使い残し、コーリャンや木の葉などである。

ウイグル族は野生植物や腐った草を動物に与えない。小麦の根をやる時もきれいに洗ってから上に小麦粉の残り粉をかけてやる。また、餌のバランスに十分気をつける、例えば、朝に草をやった

ら、昼には草以外の物、夜にはまた別のものをあたえる。さらに、朝や夜は外に連れ出し、自然の草を食べさせるのを大事にする。いつも鼻、耳、足をチェックし健康診断を行う。何か病気の症状を見つけたら、すぐに伝統的な治療法を使って治療する。

こうした家畜飼育産品は農民自らや商売人によって市場に出される。主な畜産品は、羊、牛、山羊などの肉、皮、毛、内臓、鶏やアヒルの肉や卵、農業や交通手段に使うロバ、駱駝、馬、牛乳、ヨーグルト、チーズ、バターなどである。

以上のほか、ウイグル農業ではひまわりや胡麻を材料とする油作り、オスマ⁴⁾、ヒネ⁵⁾をはじめとする化粧品作り、様々な木作り等も従来からやっている。これらは畑の周りや農家の庭の空いている場所に栽培され、市場に出したり、自分で使ったりしている。最近では政府研究機関によって新疆ウイグル自治区が綿花作りに良い環境を持つ事が発見され、大規模な綿花作りが始まっており、この地域は全国最大の綿花基地になりつつある。

(2) 製造加工業

ウイグル族の長い定住の歴史を通じて、都市中心に独特な製造加工業が成立発展した。その歴史はかなり長く、ある分野は2000年の歴史をもつ。例えば、1959年にホータン地区のニヤ県で発掘された墓の中から絨毯が発見され、科学的な検証によってこれは紀元前220から紀元206までのものと判定された。これは中国国内で発見された一番古い絨毯である。この絨毯には「ホータンの絨毯」という文章が書かれてある。今でもホータンの絨毯は中国国内だけではなく、世界でも有名である。さらに、この地域は古代シルクロードの中心的なルートであるため、周辺国との文化交流によって製造文化の形成にも大きな影響を受けた。また同様に、ウイグルの製造加工製品はこのルートを通じて世界へ広がり、周辺国の文化の発展にも大きな影響あたえた。

現代のウイグル族は従来の製造加工業を受け継いでいる。こうした製品は個人や家族や集団を中

心に企業化した専門業者によって作られ、彼らはそれを自分の店や市場で売り、その収入で生活している。しかし、先進技術の急速な導入や社会環境の変化によって、ある分野では仕組みが変わったり、またある分野はしだいに衰退に向かいつつある。例えば、現在新疆を訪ねる旅行者が増えおり、そのため各業者は旅行者の記念品として、持ち易さを考え、従来あまりなかった小さな製品を作っている。特徴的なのは楽器で、今観光地に行くとこうしたミニチュア楽器が売られているのをよく目にする。また、昔は動物や河水の力を利用し大きな石を動かすことによって小麦粉を挽く「トグメンチ」と呼ばれる業者がいた。しかし、現在では工場で作られた小麦粉が質の面でも出来上がり時間の面でも「トグメンチ」らが作った小麦粉をしのぐため、従来の製法やそれにたずさわる業者は珍しくなっている。

[繊維業]

ウイグル族は綿、絹、毛などを材料にして様々な紡績品を作ってきた。主な紡績品としてはエトレス(絹布)をはじめとした色々な布、ドッパ(帽子)をはじめとするウイグルの伝統的な服装、家庭用製品では絨毯、毛布、布団、枕、カーテン、枕や布団のカバー、様々な刺しゅう製品、日用品ではカバン、袋、糸、ひも、ベルト、ロバや馬や駱駝などに人が乗るための様々な布具などがある。

[手工業]

ウイグル族の間では主に木、金属、石、土、布などを材料にした工芸品が多く使われる。それらは各専門業者によって作られる。木を材料にする業者は「ヤガッチ」(大工)と呼ばれる。彼らが主に作るのは、家、ビョシュック(幼児用ベッド)、箱、玩具、道具などである。さらに、ウイグル楽器の多くは木を材料にしており、楽器を作る業者は「サズチリク」と呼ばれ、彼らは主にウイグルの伝統楽器を作っている。

金属を材料する業者では、アクセサリー作りを中心とした「ゼゲルチ」と呼ばれる装身具業者、

銅材料を中心とし、「ミスケル」と呼ばれる、主に銅ポット、銅鍋をはじめとした道具を作る銅製品業者、アルミ材料を中心し、「トンカチ」と呼ばれる、バケツ、アルミ鍋、ドアロックや鍵、ヒータなどを作るアルミ製品業者、鉄材料を中心し、「トムリチ」と呼ばれる鉄製品業者などがある。さらに、様々な金属を材料にする、「ピチャクチ」と呼ばれる、刃もの業者もある。

石を材料する業者で特徴的なのは玉器作りがある。ホータンは玉の産地として世界的に有名な地域である。古代シルクロードが開通する前から「玉ロード」が開かれ、国際玉商売が始まった。そのため、新疆は「玉の天国」とも呼ばれ、今でもこの地域で玉製品作りが続いている。玉以外、色々な石を材料にした「マジャン」と呼ばれる装身具を作る業者も昔あったが、ウイグル族はこのような装身具は時代送りと感じて、あまりにも身につけなくなったため、今ではこうした業者が少なくなった。

土を材料にする業者は「クラルチ」と呼ばれ、花瓶、皿、茶碗、水がめ、人形、手を洗うために使うポットなどを作る。このような製品の色やデザインは様々であり、ウイグル美術の象徴でもある。

布や毛を材料にする業者は「トマクチ」と呼ばれ、ウイグルの伝統帽子を作る業者、「キグズチ」と呼ばれる毛布作り業者などがある。

その他、ウイグル製造加工業では菓子作り業者、「コンチ」と呼ばれる動物の皮を加工する業者、ローソク作り業者、紙作り業者、石けん作り業者、「モズドズ」と呼ばれる靴作りや修理業者、「セッラチリク」とよばれる、ロバや馬や駱駝などに人が乗るための車をはじめ様々な道具を作る業者、「ジュワズチ」と呼ばれる油作り業者、漆塗り業者などがあつた、しかし、現在こうした業者の中で残り続けているのはわずかである。

(3) 商業

ウイグル族は古くから様々な国際商売や地域商売に従事してきた。古代シルクロード時代はウイ

グル商業の最も盛んな時期であつた。これに伴い各サービス業も発展してきた。そのためウイグル族は他の国の人々から「商人」とも呼ばれる。例えば、カザフ族はウイグル族のことを「サルト」と呼ぶが、「サルト」はカザフ語で「商人」という意味である。

ウイグル族は従来から行ってきた商売やサービス業を現在まで継続しており。この過程で取引札も発生した、例えば、今まで文献に記載されたこの地域で利用された札には、紀元1世紀から2世紀の間には「ウドン札」(主にホータン地域)。紀元3世紀から8世紀の間には「コーサン札」(主にクチャ周辺)、10世紀に発行された「カルハン国家札」(全地域)、13世紀から16世紀の間には「チャグタイ国家銀札」(全地域)、18世紀には、「イエケン銅札」(全地域)等がある。20世紀に入ってから以後、1950年までは新疆の政治情勢が不安定だったため、様々な札を利用した。50年からは人民元が新疆の取引札になった。

ウイグル族の商業は基本的に「ソデゲル」(Sodigar)と「ティジャレットチ」(Tijaratchi)の2つに分けられる。「ソデゲル」は主に海外や他の地域や農村から様々な商品を買付け、都市に運んできて売ったり、土産品を輸出したりする業者を示す。主に扱うのは、昔は布、服、皮、果物、動物、薬、調味料、本などの輸入や輸出をしてきたが、いまでは、それ以外に車、様々な家電製品、農産機器、楽器などを輸入することも増えた。

「ティジャレットチ」は基本的にある分野を中心とした専門店での販売やサービス業者を示す。かれらは「ソデゲル」たちが輸入してきた商品を専門店で販売したり、自分の技術を生かして様々なサービス営業をしたりする。具体的には「バックル」と呼ばれる果物専門業者、「テリチ」と呼ばれる皮製品販売者、またレストラン営業者、「セテラチ」と呼ばれる美容師、「カッサブ」と呼ばれる肉販売者などがある。

商人達は商売から得られた収入で生活し、余裕があれば商売を広げる。彼らは従来からウイグル族の中で最も生活レベルが高い、富裕な人々である。

Ⅲ 親族関係

ウイグル族の家族関係では、父と息子および男性の兄弟関係が社会的に重要である。伝統的には3世代、4世帯が同居する家族制をとっている。

他の民族と同様に、ウイグル族も非常に長い期間封建権力の統治下で暮らしていたため、家族関係の習慣の中で父系原理が強く現れた。家長権は男性に属することになり、彼の家庭における地位と権力は大きくなり、家長以外の家族は、その判断に絶対的に従うことを義務づけられた。

このような状態は家庭内部の役割分担、相続権、家庭の社会との関係処理する権利という面で現れる。例えば、全部の家計の収支を管理する、処理する、家庭のすべての財産を所有する権利は家長である男性に属し、その他の成員は家長に代わることができなかった。もし家長である男性が死亡した場合には長男が家長を継ぐ。もしその家庭内に男子がいない場合には、亡くなった男性の妻が家長の役を引き継ぐ。そしてその妻が亡くなった時点で財産を娘たちで分配する。もし子供がまったくいない場合には、亡くなった夫婦の財産は夫の男兄弟に相続される。

家の財産の相続という点では、原則してイスラム法で定められた遺産配分の規定を実行している。すなわち家族の中で、男子は1人前、女子は半人前という割合に従って遺産を分ける。ただし、農耕具、食器、炊事道具、家具などは遺産の外とされ、これらのものはその家を継ぐ男子に残された。もし両親が健在の時に養っていた孫やひ孫やその他の者がいれば、彼らはこの家の成員として、別の住居に住むことになっても、同様に家庭の財産を相続する権利を得る。

ウイグル族の間では、男子が成人して結婚した後も独立して別世帯をかまえることはなく、親と同居することが多い。もしも独立することになった場合には、両親が健在である時には必ず、家計まで別にされることはない。両親が健在であるのにもかかわらず、遺産を要求することは一般的には極めて良くないことだと見なされる。他の子供

たちが成人して別の住居をもった場合には、末子が父母と同居してその家を継ぐことができる。それ故、ウイグル族の多くの昔話やダスタン（叙事詩）の中では、末子が勇者あるいは賢者として讃えられる伝統が強調された。

[親族名称]

ウイグルの習慣では、「私」を中心として上4世代、下5世代まで直接の血縁カテゴリーを構成する。この血縁関係同士の婚姻は禁じられる。

<基本親族名称>

祖父：chong dada 妻：Ayali 叔父：Tagha
祖母：chong ana(apa) 夫：eri(yoldeshi) 叔母：Hamma
父：dada 兄：aka いとこ：nevra aka...
母：ana(apa) 弟：ini
息子：ogol 姉：acha
娘：kiz 妹：singil
孫：nevra

ウイグル社会は早くに封建制に移行したため、その家族構造の中に氏族や部族生活の影響は目立たない。その為、家系の名また世代間の関係を際立たせる術語も見られない。同世代間の長幼の序は、「大きい」「小さい」などの形容詞をつけることによって区別される。

父の兄：大きい叔父 chong tagha（地方によっては chong ata）
父の弟：小さい叔父 kichik tagha（地方によっては kichik ata）
父の姉：大きい叔母 chong hamma（地方によっては chong hamma）
父の妹：小さい叔母 kichik hamma（地方によっては kichik hamma）

『トルコ語大辞典』の中では、ウイグル人の姻族の専用名称について若干の記述がある。

yiyaq : 夫にとって、妻の兄弟

ini : 妻にとって、自分より年少の夫の兄弟
 ichi : 妻にとって、自分より年長の夫の兄弟
 sinil : 妻にとって、自分より年少の夫の姉妹
 baldiz : 夫にとって、自分より年少の妻の姉妹
 agha : 夫にとって、自分より年長の妻の姉妹
 (マフムート・カシュガリ『トルコ語大辞典』3
 巻, 7ページ(ウイグル語版)より)

[家族関係]

ウイグル族の間では一貫した家庭の道義や子育てルールがある。家庭道義の内容は道德教育を重視すること、先祖代々続けてきた職業や大切とされる物などを伝承し、それらを守ることである。子育てでは両親の責任が問われる。子供が悪いことをしたら「両親が子育て義務を果たしてない」と思われ、両親はその社会での尊敬を失う。男子の場合は父が、女子の場合は母が教育を行う。男の子を子供の時から自分の後ろに連れて歩き、様々な物事のやりかた、道德、人々と付き合い方などを教える。家に客が来た時にきちんと挨拶をさせたり、客の手洗い水を出したりして、様々な社会ルールを教える。女の子の場合は母親が家事のやり方、料理の作り方など女がその社会でやるべきことを嫁に行くまで全部教える。

ウイグル族の間では初出産は必ず花嫁の両親の家族が面倒を見る義務がある。子供が生まれてから40日間過ぎたら、花嫁の両親が「出産お祝い式」(Boshuk Toy)をあげる。式には新郎の家族と親戚などがよばれ、新郎の両親が出産のお祝いとしてアクセサリーや服などを持って行く。式が終わったら花嫁と子供は新郎の家に戻る。

[親戚との関係]

ウイグル族は血族関係や姻族関係で結ばれた成員すべてを互いの親戚(tukqan)と認める。姻族の血族はもちろん、姻族の婚族もお互いに親戚と呼ぶ。親戚関係を持った人々はお互いに対して守らなければ社会ルールがある。例えば、親族の中の誰かの結婚式やお葬式などでは血族も婚族も共に式の客ではなく主人側の一員として、訪れる客

に対して丁寧にサービスしなければならない。したがって、どんな事情があっても式に欠席してはいけない。誰かが病気になって入院した場合、病院にお見舞いを欠かさない。親戚が住んでいる所に出張や旅行で行った場合、必ず親戚の家に挨拶に行かなければならない。学校や仕事の関係で長い間そこに住むことがあれば、地元に住む親戚が新しく訪れた親戚に対して色々な面倒を見たり、生活に慣れるまで助け合ったりする。

ウイグル族の親戚関係は非常に広範囲に及ぶため、お互いに知らない親戚もいる。しかし、親戚関係にあることが分かったら、親戚として果たすべき義務を果たす。血縁カテゴリーを構成する以外の親戚の結婚は禁じられていない。「親戚じゃない人々と結婚するより親戚と結婚したほうが良い」という意識もある。かつて母の兄弟の子供は血縁カテゴリーに入らないと思って結婚したケースが多かったが、ここ30年ではこれが間違いであることに気づいて、禁じられるようになった。

また、ウイグル族の間では「はさみ式結婚」(Qayche Toy)と呼ばれる結婚も多く見られる。「はさみ式結婚」というのはA家族の息子とB家族の娘と結婚するとともに、またA家族の娘とB家族の息子と結婚する場合で、つまり姉妹交換婚のことである。このような結婚は親族関係をより緊密化させるための良い方法と思われる。

Ⅳ 地域社会

[村・町]

ウイグル族の間では同じモスクに集会する人々の家族があつまって一つの村や町をつくる。これはウイグル語で田舎の場合に「イエザ」(村)、都会の場合に「メーヘッレ」(町)と呼ばれる。その規模は人口密度によって異なるが、多い場合は1000世帯以上、少ない場合でも90世帯が一つの村や町に属する。集落の形は、れんが造りの四角い家が一軒一軒つながりながら道沿いに並ぶ形である。村と村や町と町のはっきりした境界線はない。

この範囲内で問題が起こった場合、集会を開い

て会議を行い、討論し結論を出す。一般に指導権は村のアクサカル（年輩）が持つ。若者や女性は意見を出す権利がない。

村や町は基本的に以下のような活動を行う。誰かが病気になった場合は合同の祈りが終わった後、一緒にお見舞いする。誰かが何日間もモスクの祈りに出なかったら、原因を聞きに行き、病気か、行方不明か、死亡か等を確認する。皆の手伝いが必要となったら、協力したり、病気を治す方法を検討したりする。領域内で強盗、スリ、けんか、浮気などが起こったら、対策を検討し解決する。農繁期の農作業、家の新築、結婚式、葬式、自然災害があったときなど様々な活動を村人の協力で行う。定期行事は毎週金曜日や祭りの礼拝以外に、マシュラプやナブルズ等の定期祭礼、また墓参りなどもこの村や町を中心に行われる。

[隣人関係]

ウイグル族は隣人関係を大切する習慣があり、「遠くに住む親戚より近くの隣人の方が親しい」という諺がある。隣人の範囲については厳密なルールはないが、最低でも周りに住む一つの方面の3世帯範囲までと考えられる。

近隣間では次のような習慣がある。隣人はお互い対して友好的関係を持つ。隣人が結婚式や葬式を行うときには誰よりも重い責任を持って手伝いをする。お互いの家にほぼ毎日訪問し、健康状態を聞いたり、お話ししたりする。お互いに物を貸し借りしたり、自分が作った料理を交換する。引越して来た隣人や別の所へ引越す隣人を家に招待する。隣人の家族で不幸があった場合には娯楽的な活動をひかえる。隣人の家に遠い所から客が来たら、知り合いでなくても自分の客と思って家に招待する。隣人の大人が出かけることになったら、子供の面倒をみてやるなど、隣人の子供と自分の子供たちが仲良く付き合うようにする。

V 宗教・信仰

ウイグル族の間には10世紀の中頃からスンニ派イスラム教が普及し始め、16世紀には全てのウイグル族がイスラム教を信仰することになった。今までも99%のウイグル族はイスラム教を信仰している。そのため、ウイグル族のあらゆる活動はイスラム教の教えに従って行うが、地域によってその真剣さが異なる。南部の住民や田舎の人々はより真剣で、イスラムの信者としてやるべきことはきちんとやっている。北部や都会の人々は真剣さがより薄く、儀礼・祭礼などではイスラムのルールに従うが、それ以外のことにはあまり真剣にやっていない人が多い。

イスラム教の普及以前はウイグル族はトーテミズム、シャーマニズム、マニ教、ゾロアスター教、仏教、キリスト教などを信仰してきた。今でもこのような宗教や信仰の要素はウイグル族の信仰の中に痕跡をとどめている。例えば、トーテミズムは特定の動物や植物を自分らの先祖と思って大事にする信仰である。ウイグル族は他のトルコ系民族と同様に狼を自分らのトーテムとする。そのため、狼の踝をお守りとして首にかけたり、旅に出るとき狼を見かけたら「良い旅になる」と信じる。シャーマニズムはお祈りで悪霊を追い放う信仰である。今でも病院で治らない知的障害者についてはペリホ（Perhon）と呼ばれる音楽に合わせてお祈りする人を頼んで治療を受けている。また、赤ん坊を悪霊から守るため寝ている赤子の枕の下にナイフを置いたり、寝台の周りでアドリスマンと呼ばれる植物を燃やして煙を出したりする。こうすると悪霊が近づけないと信じている。ゾロアスター教は火を信仰する宗教であり、今でもウイグル族の間では新郎新婦を火の上をまたがせて家に入れる習慣がある。マニ教は光を信仰する宗教であり、ウイグル族は光を出すものを非常に大切にする。例えば、ウイグル族は太陽がある方面に向かって小便しない。そのため、トイレもそれに合わせて作られる。顔を洗わないうちは太陽を見ない（外に出ない）。また人の名前を付けるとき

太陽、星、月などに関連した名前を選ぶ。以上の様な宗教や信仰は正規のかたちでは今存在しないが、今でもウイグル族の生活の中に広く存在している。

宗教以外にも様々な信仰がある。これらは宗教と異なり、ウイグル族固有の生活習慣の過程で形成された。以下その中のいくつかを紹介する。

[数に関する信仰]

ウイグル族は奇数を大事にする習慣がある。そのため数を選ぶときに奇数を優先するが多い。例えば、階段の数は奇数で作る。手を3回洗う。様々な行事の日は奇数日を選ぶ。キャラバンのラクダは奇数で構成する。

また、ウイグル族は7、9、40などの数を偉大な数と思われる。例えば、妊娠の期間は9ヶ月と9日と考える。豊かな生活は「tokkuzi (9) tel」と言う。子供が生まれてからの40日目、人が死んだ後の40日目に特別の式を行う。死んだ人の親戚は40日間喪に服する。男の子は7歳になったら割礼する。死亡した人のお葬式は7日目に行われる。

[自然に対する意識]

ウイグル族は「土」「空気」「火(光)」「水」を自然界の基本要素と認識している。そのため、多神崇拝の時代では「Kok tangri」(空の神)、「yar-su elahi」(土地と水の神)、「Ot elahi」(火の神様)などの神がいると信じてきた。さらに、四季節(春、夏、秋、冬)；四方面(北、南、西、東)；人生の四段階(子供、若、中年、年輩)四つの性質(熱い、冷たい、湿った、乾いた)など「四組」意識もこのような自然界の基本四大要素から生まれた。

このような意識は今でも続いており、例えば、商取引が成立した時、両者は手で土に触って握手することで真剣な気持ちを表す。また商人は一日の最初に得た金に土を塗る。また、水で泳いだ夢を見たら良い事が起こると信じる。また水にゴミや汚物を捨てると神の重い裁きを受けると考えている。

[「右」と「左」に対する意識]

ウイグル族は「右」と「左」の区別を大変強く意識している。例えば、家から出入りする時右足を先に踏む。服を着る時は右から始める。左手で人に物をあげるのは失礼な事と見なされる。寝るとき右側に向かって寝ると悪い夢を見ると信じる。良いことがあったら「ことは右に向かった」、悪いことがあったら「左に向かった」という。

[オルダム巡礼とマザール(聖者廟)崇拝]

ウイグル族は998年以来カシュガル県のイエンギシェ県に位置するオルダムを訪問する習慣がある。今でも毎年一万人以上の人がここに訪れる。オルダムは974年から998年までイスラム教を信仰するウイグル族と仏教を信仰するウイグル族の間で激しい戦争が起こった場所で、さらには死んだ戦士が埋蔵された地域である。そのため、人々はそこへ行き、戦争で死んだ戦士らの墓を参拝する。

またウイグル族の信仰の中では、マザール(聖者廟)崇拝が一定の地位を占めている。人々の間では、イスラムの聖者の墓廟、或いは聖者ゆかりの地であるマザールは、ある種の神聖な力を持つと信じられており、厄除けや病気の治癒、子宝を授かることなどを願ってマザールを訪れる人が後を絶たない。そのほかにも、まじないや自然崇拝に起源を持つと考えられる儀式などが各地に残っており、イスラム化以前の土着宗教の名残と考えられている。

[塩やナンを大切する]

ウイグル族の間では塩やナンを大切する習慣がある。例えば、旅に出る人に対して親戚や友人が良い旅になることを祈ってナンをプレゼントする。夢でナンを見たら「長い時間離れた友達に合える」と占う。花嫁は家から出る時両親はナンを頭の上で回して祝福する。結婚式の時に新郎新婦が塩の入ったナンを食べさせられる。嫁の持参品の中に必ず塩が含まなければならない。またウイグル族の間では塩やナンを踏むことは大変失礼なこととされる。

Ⅵ 儀礼

(1) 赤ん坊の命名儀礼 (At koyux)

これは子供が生まれてから数日(2, 3日)過ぎた後で行われる儀礼である。まず、赤子の両親が一番尊敬する人(ふつう父親の両親)が赤ん坊の名前を決める。名前が決められたら、その町や村の宗教指導者(アフン)を家に呼び、イスラム教のルールに基づいて命名する。宗教指導者は赤ん坊を手を持ち、イスラムの聖地メッカに向かってお祈りした後アザーンを唱え、「あなたの名前はXXXになった」と言いながらジュイナマズ(イスラムのお祈りで使う幅60センチ長さ1メートルの絨毯)の上で3回転がらせる。その後、参加者は一人ずつ赤ん坊を手を持ち額にキスしながらお祝いの言葉を言う。これが終わったら参加者は食事で接待され、食事が終わったら宗教指導者にお金や礼品を与えた後、ふたたびお祈りして、儀礼が終わる。参加者は宗教指導者以外に両家族の男性親族10人前後で構成される。

(2) 出産祝い (Boshuk Toy)

ウイグル族の間では初出産は必ず花嫁の両親の家族のもとで行い、出産前から出産後の40日まで花嫁と赤ん坊はその家庭に滞在することになる。出産儀礼はその40日目に花嫁の両親の家で行われる儀礼である。この時、新郎の両親、親戚、隣人、友人などが招待される。新郎の両親が赤ちゃんのために布団、おぐるみ、衣服など、花嫁のために衣服やアクセサリーなど、嫁の両親やその家庭の重要なメンバー(嫁の姉妹、兄弟、叔父、叔母など)に感謝の気持ちを表すための礼品などを持ってくる。他の客もお祝い品を持って式に参加する。式では、訪れた客らに食事を供する。また、近所の子供たちにもお菓子が配られる。この儀礼には手伝いする男以外の男性は参加せず、女性中心の催しとなる。客が帰った後、新郎の家族が嫁と赤ん坊を連れて帰ることになる。家から出る時に嫁と赤ん坊の頭の上で、火をつけて煙るようにした草を何回か回す。

(3) 割礼儀礼 (Sunnat Toy)

割礼はイスラム教を信仰する人々に義務付けられる。ウイグル族は一般的に男子が5歳から7歳の間に割礼する。割礼儀礼は状況に応じて割礼する前の数日や後の数日の間、またはその当日に行われる儀式で、一般に秋や春に行われる。式には親戚、隣人、友人などが招待される。当日、割礼される子供に新しい服着せ、腰に赤いベルト(布)と胸に赤い花などを付けさせる。式で様々な余興(音楽や踊り)を楽しんだ後、割礼が始まる。割礼する前に子供に大小便をさせたり、親戚が自信を持たせる言葉をかける。割礼をする時には、子供が一番好きな大人の男性が子供を抱置き、専門の割礼師(habdai)がお祈りしながら割礼する。割礼が終わったら切られたところの血を止めるため、火で消毒した綿で包む。痛みに耐えられず子供が力泣き呼ぶと血が止まりにくいいため、子供の口にゆでタマゴを入れて、泣くのをおさえる。子供が泣きやんだ後、参加者がお祝いの気持ちで子供にお金上げる。割礼の傷は一般に一週間で治り、子供は普段の生活にもどる。

(4) 結婚式

ウイグル族の結婚の手順は、住んでいる地域の経済社会状況や地域習慣の違いによって様々であるが、一般的には以下の段階に分けて行われる。

[アリチエベルテシュ (使者の派遣)]

男性と女性がお互いに知り合って一定期間付き会った後、結婚することを決めたら、双側が両親に知らせて許可をもらう。両親が結婚を適切と思ったら、男性側から親しい友人や親戚で構成された使者を女性側に送り、女性側の意見を聞く。使者は両側の間の交渉の役を果たし、結婚の様々なやり取りを成立させる。

[チャイ]

「チャイ」という言葉はウイグル語で「お茶」の意味の他「宴会」や「お礼」という意味がある。ここで使われるチャイは「お礼」の意味でのチャ

イである。結婚おけるチャイはキチク（小）チャイとチョン（大）チャイに分けられる。キチクチャイというのは結婚の合意が成立した後、男性の母親が女性の家族にお礼の気持ちで挨拶に行くことの呼称である。具体的には男性の母親が数人の女友達と使者を連れて、嫁の両親と嫁のために衣服など礼品を持って女性の家族を訪問する。嫁側は訪れた客のために家で小規模な宴会を催し、宴会が終わったら、これから行われる結婚のためのスケジュールを話し合って決める。

チョンチャイは、次の段階で再び嫁側の家で行われる、より大規模な宴会のことである。スケジュールで決められた日に、婿側から男性の母親をはじめ親戚や友人から成るおよそ50人の女性が婿性側で用意された婚資、宴会に使う様々な資材（牛、羊、お米、油、野菜、お砂糖、塩、お茶、招待状など）、嫁に贈る色々な洋服、アクセサリー、化粧品、日用品、嫁の家族や親戚のための礼品などを持って、女性の家を訪問する。嫁側はより大規模な宴会を行って、客らを招待する。宴会が終わったら、婿側が持ってきた物を一つ一つ名前を呼びながら皆に見せる。また、嫁側からも新郎や家族のために礼品を用意し、その場で皆に見せながら婿側に渡す。これが終わったら他の客らも嫁側が用意した結婚の記念品として礼品をもらい、式が終了する。

〔ニカ〕

「ニカ」はイスラム教を信仰する全ての男女が必ずやらなければならない義務である。ニカしないで男女が同居することは許されない。結婚式を挙げる条件が整っていない場合は、ニカだけ行っで一緒に住む男女もいる。

ニカは一般的に結婚式の日の朝に宗教指導者の司会で嫁の家で行われる。この時、新郎側から新郎の父、友人、親戚など男性から構成されたメンバー、また新婦側から新婦の家族、友人（女性）、親戚などが新婦の家に集まり、男女は別々の部屋に分かれて待機する。皆が朝食を食べた後、宗教指導者が結婚ということのイスラム教での教え、

結婚した人のムスリムとしてやるべきこと、禁じられたことなどに関して講義を行う。この後、お祈りをし、宗教指導者が新郎に対して「A君、あなたはBの娘Cを自分の妻として認めますか」と聞く。新郎は「認めます」と答える。次に新婦に対して「Cさん、あなたはDの息子Aを自分の夫として受けられますか」と聞く。ウイグル族の女性はこれに早く答えるのは恥ずかしいと考え、同じ質問を3回繰り返した後、「受けられます」と答える。宗教指導者が彼らは夫婦であることを宣言した後、みんな共に「おめでとうございます」と言って式が終わる。家から出る時に若者は「アララ…」と言いながら、皆で新郎をかかえ上げて、投げ飛ばしたりして、大騒ぎする。

〔結婚式〕

結婚式は年寄りから子供までの人々にとって喜ばしい大きな儀礼である。行われるイベントは地方によって様々であり、ある地方では三日間続けで行われる場合もある。また、結婚式で演奏される音楽や踊り、新郎新婦の衣服、行われる場所、招待された客の訪れる時間、宴会で出される料理など様々な点も地域によって異なる。ここでは、結婚式の一番中心となるトイコチュルシュ（嫁を迎えに行く）を紹介する：

嫁迎えは一般に夜行われる。結婚式の宴会が終わった後（地方によって宴会はその後行うこともある）、新郎側は音楽を流しながら、嫁の家を訪れる。新郎の親しい友人達は嫁の家の周りで踊ったり、口笛や指笛を吹いたり、詩を読んだりして、大騒ぎする。嫁の両親からイスラム教のお祈りを受けた後、新郎側から来た女性達と一緒に（新郎新婦は同じ車に乗って）頭をスカーフで覆われた嫁は、大声で泣きながら、両親と別れる。家を出る前、両親は嫁の頭の上でナンやスプラ（料理するために使う布具）を3回まわして、祝福する。嫁を新郎の家に着いたとき赤い布で作ったパヤンダズを踏ませながら、家に招き入れる。少し時間がたつと新郎の母親が嫁の頭にかぶされたスカーフを取って、嫁の額にキスする。その後、これに

参加した皆にハンカチなどをくばり、式が終わる。若者は踏まれたパヤンダズを破って結婚の記念品として保存する。

結婚式の一般的な式次第は以上のとおりだが、事情によって変わりうる要素をいくつかあげる。まず参加者は、一般に両側の家族の友人、親戚、近所、ある場合によって全ての村びと、職場の同僚などが招待されるが、人数はその家族の新郎の人付き合いによって多かったり少なかったりする。式によって100人から数千人までの参加者が集まる。

場所は両側の家で共に行われることが多いが、地方によっては嫁の家で行われたり、家が狭い場合には近所の家を借りたり、レストランを借り切って行われたりする。また、男性と女性、年寄りと若者など別々の場所でやることもある。

時間は地域によって朝から夜までやったり、昼からやったり、何日に分けてやったりする。また参加者も、人によって早く行ったり、遅く行ったりする。

式で供される余興については、音楽は欠かせないものとなる。式の行われる場所、時間帯、参加者などの違いによって音楽も異なる。例えば、客が訪れる時間の音楽と嫁をもらいに行く時間での音楽では楽器も違う。年寄りがいる場所では伝統音楽が、若物がいる場所ではポピュラー音楽が演奏される。また、参加者は皆音楽に合わせて踊ったり、歌ったりして楽しく結婚式を楽しむ。音楽以外に、嫁のために詩を読んだり、皆を喜ばせるために、村の中で上手な人が笑い話をしたりする。

[サラム（挨拶）に行く]

サラムは結婚式の次の日に新郎新婦と付添の友人などが花嫁の家族に挨拶に行くことである。

[チラク]

チラクは、新郎新婦双方の家族が結婚式の労をねぎらい、両側の親戚をお互いに紹介する催しである。一般に結婚式を行った週の間に、まず新郎の家で、そのあと新婦の家で行われ、親戚や近所

の人が招待される。

(5) 葬式 (Nazir)

葬儀は3日目の式、7日目の式、40日目の式、1年目の式などに分けられる。地方によってこれ以外に5日目の式や20日目の式を行う場合もある。

3日目の式は遺体を洗い埋葬することが中心である。遺体の上半身（腰の上）を洗う人一人、下半身（腰の下）を洗う人一人、水を用意する人二人の計四人を雇う。彼らが遺体をきれいに洗った後、キペン（白い布）で遺体の全体をくるむ。子供や親戚が送別のために集まるが、死んだ人が男性の場合は妻が、女性の場合は夫が送別に来ることは禁じられている。送別が終わった後、遺体はタブト（遺体を運ぶための箱）に入れられ、イスラム教の一日五回のお祈り時間の一つを選んで、モスクに運ぶ。男性親戚や友人らはモスクに集まり、イスラムの祈りを終えた後、宗教指導者の司会でナマズチュシュルシュ（送別の祈り）が行われる。この後、友人や親戚が四人一組で順番にタブトを担ぎ、町中を歩いて運んで、用意された墓地に行き、再度お祈りした後、埋蔵する。埋蔵の後、参加者は死者の家族を訪れて、お祈りする。

7日目の式、40日目の式、1年目の式などは、冥福を祈る儀式で、形は全て同じである。近所、知り合い、友人などが故人の家に招待され、皆で食事した後、冥福を祈る祈りをする。ウイグル族の間では葬儀に香典等をもらうことは禁じられている。

ウイグル族の間では死んだ人はどんな人でも非常に丁重に扱う。そのため、死んだ人の名前を直接呼ばずに「マルフム誰々」と呼ぶ。遺族の男性は腰に白い布ベルト、女性は白いスカーフを着ける。また、死後40日目まで（親族関係によっては一年間）白や黒以外の服を着ない。遺族男性は葬儀（7日目の式）が終わるまで白いベルトをはずさず、またひげを剃らない。女性の場合は「40日目の式」が終わるまで、白いスカーフをはずさない。

ウイグル族の間では、死んだ人の為に親族が泣

きながら語る、自分の愛情や別離に対しての悲しみを表す詩(歌)がある。これはウイグル語で「ハザ」と呼ばれる。葬儀で音楽は禁じられているため、ウイグル族はこれを音楽と思わないが、実際はメロディをもった歌である。これらは歌う人が自作したもので、人によってメロディも歌詞も異なる。

Ⅶ 祭礼

(1) ノブルズ祭(年祭り)

これは春の始まった喜びを表す伝統的なお祭りであり、中央アジアに暮らしているウイグル、カザフ、ケルゲズ、ウズベク、タータル、タジクなどの諸民族共通の祭りである。この祭りは古くからシェムシア暦(太陽暦)に基づき冬が終わりの夜と昼が同じ時間になる日(西暦の3月21日)に行われる。この日を新しい年の始まりと扱う。

ノブルズ祭の日、子供も年輩者も皆伝統服装を着用し、近くの景色の良い場所に集まる。この場所では様々なノブルズゲームをしたり、新年を迎える気持ちの詩を読んだり、役者達が様々な演劇を上演したり、音楽演奏者が自分らの楽器を持って演奏したり、演奏された音楽に合わせて人々が踊ったり、競馬をはじめ様々な伝統的スポーツ競争やったり、サーカスの上演が行われたりする。したがって、この場所は皆が自分らの得意な分野を人に見せる場となる。また、皆の協力で集めた材料でいくつかの大きい鍋を使ったノブルズ料理を作って、一緒に食べる。この祭りが行われる期間、かつては一般に二週間と決められていた。現在は多くの地域では三日間行われる。

この祭りはいつから始まったか、詳しく書かれた資料はないが、催し内容や広がった地域から見るとウイグル族がイスラム教を信仰する前からある祭りであることは間違いない。

(2) ヘイト(heyti)

ウイグル族のイスラム教信仰が始まって以来、イスラム教関連の祭りがウイグル族の間でも行わ

れることになった。典型的なのはロズ(ラマダン)祭とクルバン(犠牲祭 Eid-ul-Azha)祭である。これはウイグル語で「ヘイト」と呼ばれる。今ではこの二大祭りはウイグル族の間で宗教的な意味よりも伝統的な意味が強くなっている。

ロズ祭はイスラム教を信仰する人々が毎年行う一ヶ月間の断食が終わった日に行われる祭りである。この日の朝、男性は近所にある一番大きいモスクに集まり、集団で祈りをした後、親族の墓地に墓参りする。この後家に戻り、若い家族が子供たちを連れて、お年寄り親族の家族やその前年家族の誰かが亡くなった友人の家族を先に訪問し、次の日から友人、近所、同級生、同僚などの家族を一つずつ訪問する。これはウイグル語で「ペーテオクシュ」と呼ばれる。この祭りは一般に3日間行われる。祭りの数日前から、皆が家で大掃除したり、様々な料理や食べ物を用意したりして祭りの準備をする。子供たちは家に訪問した大人からヘイトレク(お年玉みたいなもの)をもらい、自分の好きな物を買って遊ぶ。

クルバンは一般にロズ祭の70日目に行われる。この祭りで人々が行う事はロズ祭のとき同じだが、違いはこの日どんな家庭でもオスの羊を供犠(殺す)して、家族を訪れる客に食べさせる。また、経済状況におじて、イスラム教の聖地メッカを訪れて、そこで過ごす人もいる。

(3) 雪祭り(ゲーム)(Karliq oyoni)

ウイグル族は雪を神様の感謝の気持ちと信じるため、その年に降った初雪を大事にする。初雪が降る前、誰かがある家族を相手にして、以下な様なカルレク(詩)を紙に書いておく。

「雪でカルレクを送った、我がゲームが始まった、この雪を喜んで、君にカルレクを送った。」という詩から始まって、「カルレクを送った人を捕まえたら、顔を黒く塗って我が前に来たら。」という自分要求示す。

雪が降ったその日や翌日に目標の家族のところに行って、迎えに出た人の手に用意した手紙を「あなたにカルレクだよ!」と言いながら渡して早く

逃げる、手紙をもらった人が出した人に追いつき捕まえたら、出した人の顔を黒く塗って、ジャケットを逆に着用させ、道を歩かせる。また、捕まった者は村や町の人々の為にメシュレブ(パーティ)を用意することになる。もし捕まらなかったら、カルレクを受けた人や家族がメシュレブを用意しなければならない。今でもこれは若者中で一番人気が高いゲームとなっている。

(4) メシュレブ

「メシュレブ」という言葉はウイグル語でお祭り、お祝い、パーティ、あるいは音楽のジャンル呼称など広い意味を持つ。ウイグル族のメシュレブには様々な芸術を含む総合的な活動であり、その目的は娯楽である。これは地域によって行われる時期や場所も異なるが、いずれにしてもその基本的な内容は音楽や踊りと物笑い(ゲーム式)である。この二つの内容は重ねて行われる。

主な形式は、まずメシュレブの行われる場所と日を皆に知らせる。人数制限や男女の区別などなく、そのことを知っているどんな人でも参加することができる。開催者(人や集団)は前もってメシュレブピギ(司会)、イゲトベシ(行事次第を構成する人)、ダラベギ(音楽や娯楽を管理する責任者)、コルベギ(資金の責任者)、パッシャップ(警備責任者)など担当者を決めておく。当日、音楽演奏者が先に集まり、楽器などを調律した後、演奏が始まる。音楽の演奏によってメシュレブの始まったことが分ると、人々が自分の都合に合わせて、会場に集まる。音楽演奏者の前に踊りや演劇の出来る場所をあけて、その回りに丸い形に集まる。大勢人が集まるまで、先に来た人は踊ったり、音楽を楽しんだりする。人がかなり集まった後、音楽は一時止まり、司会がこのメシュレブは何のためにやっているか、役者は誰々かなどを説明し、メシュレブが正式に始まった事を宣言する。その後、メシュレブのゲームが始まる。ゲームの後、再び音楽が始まり、皆音楽に合わせて踊る。疲れを感じてきたら、音楽を止めて、演劇や物笑いなどの催しをやる。こうして何時間も、場合

によっては何日間も催しが続けられてメシュレブは終わる。

典型的なメシュレブは作物の芽が出はめたったことをお祝いするマイサメシュレブ、イリ地方で行われる男性中心のオトズオゴルメシュレブ、ケイェト(結婚)メシュレブ、収穫が終わった時期に行われるコック(収穫)メシュレブ、作物を植え終わった時期に行われるウルクセレシュ(植え付け)メシュレブなどがある。

おわりに

以上、中国新疆ウイグル自治区に暮らすウイグル族の民族誌的概況を、生業、親族関係、社会関係、宗教信仰、儀礼・祭礼などの点から概観してきた。ウイグル族の生活を考える上での基礎資料の提示を心掛けたため、一般的な事象の紹介にとどまり、とくに地域的な違いにまで言及することができなかった。また筆者の研究テーマがウイグル族の民族音楽の変遷であるため、儀礼や祭礼に多くの紙面を割いた反面、親族関係や社会関係を踏み込んで検討する余裕がなかった。しかし新疆ウイグル自治区在住のウイグル族の生活の概観は以上で提示できたものとする。

注

- 1) 下記の民族別人口表も含めて、数値は <http://www.xinjiang.gov.cn/> より。
- 2) 数値は <http://www.xinjiang.gov.cn/> より。
- 3) 中華人民共和國農村土地請負法(2002年8月29日全人代常務委可決、2003年3月1日施行)により、農民に長期(耕地請負権30年)かつ保障された土地使用権が与えられ、流動権(転貸、交換、譲渡、抵当等)も認められた。
- 4) 緑色の植物で、これから取り出した水分を、眉の化粧に使う。
- 5) 茶色の植物で、これから取り出した水分を、爪の化粧に使う。

参考文献

アブドゥケリム・ラフマン、レヴェイドゥラ・ヘンドラ、シェレブ・ホシュタル『ウイグル族の習俗』1996年、新疆青少年出版社(Abudukerim Rahman, Revaydulla Hamdulla & Sharip Hushtar, *Uyghur Orup-adatleri*)